居行子

一

15
1424
1

門 15
流 1421
巻 1

早稲田大學圖書館
昭27.6.16 受
藏書

三麻

早稲田大學圖書

居行子序

慈鎮和尚乃歌ゟ。人ゟ教ゟ。きこえ侍ふもゝふ世ゝ行て事。
人間常のすたゝ多くい皆癖ぞゝ。人の生ゝや
其氣質ゝ。天地ゝゝ數所を受ゝ。
父母乃清濁ゝゝ。其性の賢不肖厚薄を出
来ゝ。其ゝゝ屬乃性の。賢不肖強弱いさ
もあゝ。生れ生る少ゝい上貴人ゝ。下土民ゝ至數

まで業の仕業を業て生れ出
しとなれば草木の実をくひづきまぐれふるく。風
暘雨露霜雪あるの中に生長するを志ざしまら
まる枝乃数をくまれ。貴人のまとせれ立
ちる田舎人となる。土民なれよりは農育すれば田舎
者となる。士民のまとを業の上に業人の家にて
だくあぐ業ば。貴人乃身のまとを生長ば。
皆業よりの育榊ちる。世上學文よんとしたる

人。多くの言語まれも漢語をたしい俗乃身へ遠
れるのをよろこび。俗事をいやしん。今日の事に
疎し。浮世第下をすれば人い。文育愚癡を育扱
ちる。道ばかりとて高ちる無屈ちるの人多し。
佛神乃利生をせざん。あいまひする人い孫宣山伏
に計ちる。前後のうづまりにんはもを往乃
事あり。物を氣よかるべ。うきやあるまいく人いぞ
見識を人よ学ぶ。王法背くるを。何ち

をすまし毎各此心をとゝのへて癖をのゝしる況
愚がごとく儕癖なるにをゝ笑ふべきなり
あるゝ人ゝ愚ゝ侍ゝ顔回ゝ好ゝあり。
舜何人ぞ。文王何人ぞと。詩書作らざる事なし。
ゝるを生れもつかぬ。あるべからず。百里乃
歩行も一歩ゝゝ積ゝ千里ゝ及ぶ。世人のまどしきを
あゝぐ。居行子曰愚
まごゝろを学ぶ。雜を去ゝ。居行子曰愚

ゝる。狂簡ゝ身表。何を示さんや只門前
乃庭の小ゝ掃ゝ。是下の
義無ゝ癖ゝ。愚曰先王の
ゝ所ゝ為ゝ天下の重ゝ門前乃老犬を
大中の功を積ゝ。我ゝ
ゝ。何ぞ謙譲乃ゝ
ゝ是をあつ。居行子五歩ゝ
ゝ癖ゝ

癖を磨くことを志すべとなるのみならずとうのみ。
其癖を磨くは其人の。癖を面白く磨くに

明和九壬辰歳仲呂

岡本隠龍川

目録

人相乃辯
天狗の辯
豔ふ少ふ
易學之辯
仙人乃辯

居行子巻之一

西村遠里述

人相の辨

人相をとる事衆人のよろこび信ずるところにて貴賤雅俗都べてたがひよろこんで近世ひろまり行はれて郭西翁乃第子。誰それの行人の門人某こそたまの才子うど方くよ相學を唱る人多く。學乃儒先生こそ人相の才子なる人あり。又自己よ神相全篇。柳莊相法等の書ふよりて甚多を修し。往古將來の禍福をかくる人あり甚しく信ずるものの今日の生産の事。毎日の吉凶いてるまで。親疎者よをのを尋問やうよりて怙恃人あり。これこの人相家の大事の所業

そう。人相の占和漢ともにまことに有る。其起る事周服許
負よりはじまる。唐李淳風ゑん綱うんどゝいふものも皆相者の名あり。宋
漢の世より望氣呂公が高祖を相し一老夫呂后孝惠等を
相し。又相者韋賢を相し家　朝廷も高麗の使ひなどを
相せし類を以て相者のよき事とする。されども世こぞん今世人
の信じ相人のよろこぶ所なり。其身一代の貴賤をわす
るゝ。わざわひにわかれ吉凶極うり。相學とせざる人も大抵いにしへを
ゝる。今の世は家事の毎日を相者より憑み。医者より療治を
たよむやうにすりこゝろ大うるまひうる。扨又相學を信ぜざる輩を
人い天地の気をうけ陰陽の妙合によりて生ずるものなれば形の

醜猥なる人も有德なる人あり。形の美妍なる人も不德の人あり
さてわるていなり。家も眼よりも重睦あり。堂の頂羽も又重睦あり。
齊の晏子い其長五尺にもたらざれども齊の賢相なり。其御者人
うたの男なり。此類代々の歴史より和漢にわたりて相者の
占不合のことを挙ることをとる。後漢黄茅黄好書に秦の
重耶平野の人乙伝頭序烏の相わることいひ信知好で抵尻
の馬より蒙古史うりこいてを。此等ることこの相者ゝどいひまこと
非相篇うどを著す。皆こゝに相法の占不合の事をとる
うう。愚が相をこゝろあいたゝずおれ者の占百發百中して今日
乃時勢にこの無うしてこれをこのく　愚はたゝく相学の

書をよろづの人の小天地なるものなり。天文占に日月五星乃
七曜紫微天市の三垣二十八舎衆星を以て。皇帝三公
百司百官寢宮朝庭明堂倉廩府庫苑園田畠等。其
外諸物に配當して。其星の変を以て。各其吉凶を占すなり
ごとく人の面部に衆の文及び血色等。それぞれに配当し。
其変を以て吉凶禍福を占ふ。たとへば面を日月とし。左眼を
太星とし。右耳を金星。額上を火星。鼻を水星。鼻を土星
とし。人鼻を中岳とし。左右の頰骨を東西岳とし。額を
頤を南岳北岳とし。口を大海とす。掌文も又乾兌離震巽坎
艮坤の八卦の方位を建て父母妻子居宅家產乃屬を

配當し。眼鼻耳口眉を。五官と建て。天庭を初年とし。天庭
司空中正印堂を流年を建て。血色も紅色を吉とし
赤いわ。白を喪或いは憂とし。紫は吉とし。黄は吉なり
色を以て。五行及び吉凶禍福を弁じ。
たるものなり。其外の功能をもつて人をすべ。邵子京房な
どの易椁慎禪竜が天文占のごとく。掌をさんだくとし。
乃至ぜんよしてとらへるものなり。これを用するも活潑玄
これを信じて怪とするもまちまちなり。
かもこれを占て今日の產業もたとへらるまじ。君臣父子夫
婦兄弟朋友の間ぐ〳〵ぞろ〳〵のさたをあつて。何者乃吉の

年もうるまでぬとのうり。強く毒をせば人怪をむけて気ちがひ
のやまいよわべ。毒人引よりあるわざの上ようの個人あるく
人をわして来年の死すべしといへんよ。毒人今年のまで平常乃
ごく指列の疾もなく。食事もあまよ食歩りも不自由なく
ひとえに居ば徳より来年の死を怪うりて。毒身の徳を今年切
のやまいようべ。人に行乳のやまいよりひさしてひ人さうりがうるべ
ば来年死すべしと聞ても。吾身分のうちすべき業の乃法のよし
とうべでい。おのおのまましたとうり。又個人来年立身出世わるく
分限長富有よりめべしといへども。徳より今年より仏角を貴
主今の身分より奈がましたまとぷくとあてどもうよ

おもうるまでよりしといつまでもあしといへども。今のうち
屋きうべをたのよ人事とうてうまるかうり個有
のいつぶとろいぶ乃よこちぶそ。ひとりの気怪より乃。今日の
時務よいをちしがうし。乃ひとりの気怪い個人のよをきうず
しも。若うれい法世のうしひ人間万事塞翁馬。今年の
吉事来年の凶るとうべ人今の福明日の禍とうべきや
たうべうず。古主徳徳いさえを。自己の命を人今夕の生死
知べうず。かべく其気怪して。仏祖死期よのぐむ少しも不気
ことをうれやすべきや。人身の本主ろう。如ぐて天地乃屋
法さいまきば。孔よ入。乱とい。まきば。法よ入。月乃盈虚乃

ぐるく。盛衰禍福かゝるく仕たるうれ。將来一すのさたもたれ
ぬるぐるく。人事を尽くしたるうへ。人事を尽くしたるうへ。
天のうす徳ゆうくぐるきまるうるくたるので相者將来のさを
きくても。仏の為るきまるうるとたるこの相者の合不合と微い
多仕るうる。人相をよかるこゝ將来をたるこゝ。天文占星色占
易占等。ゆるきても居仕をせたるこゝ。ゆるれば合を
おり不合もあるこゝ十ゆ十ゆるくわるあるこゝ此もこの道理こ
ゑ世ぜあるいくものるう。数の仏こゝれども異同わゝ。人相こゝ星色
い自己一身の占うるきび事小し。天文の和漢ともこゝ國
天下へ對しこの事大よしこゝ己れ占うい

こゝらしらるきゝ。相法い天文をこゝ己へ〳〵とうつゝめたるこゝる
ものるう。易占い疑しへを決するるきび。天文人相等色ゝ
いゝ仕るくかるくるうる。易学ゝの説の處に委しく弁れ故こ
今こゝよのせび。契ゝて將来をこゝる占法こゝも。皆人意の
作為うるきび。万物のうるくるくまりくゝるの居仕をたるこゝ合
てこゝるきび。拘泥すゝるきまよゝるくるるこゝ
うる。然るきまるくも宇宙ゝ有るるくるのゝい。皆仏をこゝ悪仕をこゝ
すこゝん。悪人ゝあるきびこゝて善人もゝあるこゝ国家昏乱して忠臣ゝ
つゝ。そこゝをたるこゝ乱のせるくたるきまるうるくゝ將来をこゝ知こゝも
その為こゝ。相学ゝい仕るこゝをせたるこゝ上ゝるきび往古ゝ將来こゝ

に合ものとゝ後くて去る屋ものゝ

天狗の辯

世人皆いく京師ゝゝも。愛宕鞍馬比叡いづまても天狗わゝく。山上すゝよ身をきよゝせぞれい。たゝまをゝたゝ。千か大峯金比羅高野白山羽黒多諸國の高山峻嶺いづまても天狗をいゝぶとゝゝゝゝ。國ゝのこ天狗ゝゝ名あり。或い次郎坊太郎坊僧正坊日輪坊みいづるの三郎霧太郎白峯太郎うんどゝゝ。源の義経の兵法い僧正坊にゝて。其形を三尺乃ゝ寸する をゝゝ。頭巾篠緊をかけ。太刀を佩。小袴を着。異さるく髪うゝ。今ゝる山伏のかゝちのごゝ。皆人ゝをゝこゝる事ゝゝ

ぞうゝゝ。物までも愚ゝゝをゝしゝゝゝ。すまめまゝたゝゝゝ。ゝゝゝ。此方ゝゝ。愛宕山の太郎坊鞍馬山の僧正坊うんどゝ。次郎坊い女好よ依怙贔屓ゝゝゝゝ。女人の山よかましゝゝ。又叡山乃紫苑女い。女人禁制の山妻を絶ゝゝ。嶺をゝく登ゝても行の者もゝ。外ゝゝゝ。ゝゝゝゝ。震動雷電登ゝがゝゝゝを勾傾の雑魔ゝゝゝゝ。其余の山ゝの天狗ちい。中うんで。女人を嫌い治郎にてもすゝゝ。天狗わゝゝゝ山ゝゝゝ仏菩薩の地ゝゝ。甚死者忌服をいゝ。ゝゝい男女乃淫乱を忌。天狗ゝゝも陰陽のかゝよゝゝゝわゝゝれゝゝゝの一つ

うり各その帰るあの名。倭國の雄ぎ子孫にて。その時代よ
天狗よりあるとして。実神もろ〳〵。そとろ漢土天竺ふよ今〳〵
天狗とつてをのそ。八大龍王うんどのそよ釋尊七千余巻の
中も聞及ぶ。時珍ぐ李竹よ天狗と異名するとのわ是今〳〵
天狗のわ〳〵ぶ。獾のそろ。韓退之ぐ汴州乱の詩よ天狗墮地声
如雷とあり。其注よ天狗形如犬又山海經よ天門山よ赤犬わり。
天狗と名称。其光天よりとび流て星と化。長さ數十丈声雷の
ごと〳〵。こゝ天官書天文志左平御覽三才図會管窺輯要
等に所謂天狗星のまそろ。日本に人面鳥獸のとれわ〳〵ぶ。支よ
干寶搜神記よ南方越の地よ鳥わり。陰山よ擂で猪を穿て

巣を作。口の大さ數丈を代るの逆ても是を犯べ敢を燒所
毛のごと〳〵其名を治鳥とつて。異日本の天狗よ似てるとのそろ。
こゝかるる處そ。世人天狗よ化ていろ〳〵の奇妙をいへども。実
事よ来ることなしとそろ。そこ〳〵ぶ伝へいひたるそろ。天狗の
ことを書たるも天狗の日本紀三代実録ぶのごと。澄憧と
ごと書もわ〳〵ぶ。本朝紀ぶの作ることそ〳〵ろ〳〵せんとそ。い
ろ〳〵の作り事をいまそ〳〵ぶ。こゝ書ぶよむ。よ〳〵
毛のぬそ〳〵ぶ。こゝ自身よんてるとそろ。作ろ
あるとそ。天狗ぶるとそ。されども今京師の町小路遠ぶ〳〵ぶ
の上の町のことを。下の町ぶ。嘯ぶるとこ〳〵。実事よ大よ化ぶ

まれなり。ひろく世上のこと。古今にわたりて甚しかるべ
でん。古きものこそ。奇妙不思議のことゝいふべきなれ。
儒者達の大きなかんけつ。太史公の記にはじめ。書のこと
史記でさへ。実まことうつくしうして。日本の和語なるとあくまで
者の作りたるものゝ。荘子の高言ひとのこゝろ。赤漆島の業花とも
ぐ。或は東鑑甲陽軍鑑などのやうに虚のまことのいたづらに奇妙
なることゝ。今世俗の浄瑠璃本の作者の趣向のようなることを。
いつく甚面白くしていたづらに人をたぶらかす。たづらかす
もいふまでもなく天狗の所作にわざとなる教すべきものにあらず。畢
竟海中の海人漁夫のわざとく。深山の魑魅のくゝ似

たる歎めべし。快さぞまことに。陽気の凝聚するところより生じ
あるあらうを。陽気の本は天狗といふべし。今甚だを
思するに。山伏の海に西。その住といふ。多くは修験僧の住
處なれば。そもそもより行をしたゝめて。貴を西
に甚聲と出でうるにより。ひつを連鼓を背負ふる鬼の
ごときの。鞭を振る毒を思するごとし。答をよぶも同じ。
山伏の縁によりて。若神坊次郎坊うんど。山伏ら紅谷を
行ありうて。鞍馬山の僧正坊いかの山よ。僧正が谷といふ
下あるを以て行をしたるうるべ。こゝを僧正が谷とい
いうゝ壹演僧正義流乃法をひなまひ。せうなるか

又僧正が答といふてうさもうすとして大切なる僧正官といふの
御代より天狗より御訪されなんどうとうと。義経の兵法を
ゆるしたまふと。張良が圯上の老人より二巻の書を授く。軍
法の奥義を極めたまふ。又楠正成が天王寺にて老子の未来
記をうるの類なり。是皆衆人の帰依する所をとるの計策なり。
軍家よりも有事なり。義経ひとり牛若丸なりしなり。
鞍馬山にて喜三太といふる兵術者よりこれを得られまいらせ
又濃州の金比羅山に崇徳院御憤の余りより天狗よりもせ
られまいらせ。延喜の帝に菅丞相を流罪させ給ふ。
地獄より堕たまふして日蔵上人地獄へ。帝より御対面

の事を問せらるるのあるの勅をうけ勿体なき事なり。此間より住
すぐる日本のあちこちを天狗よりうけて。或は地獄へ行てかの奇
妙なる異物勝妹のものいひをうけたまはりたまふ。又ほとけ
といふとも美泉のごとく衆人にかたるべしとなり。肉身の事なれ
憤ることなかれといふとも。日蔵乃徳をいとなみて地獄へ
ゆく。金毘羅山を剪くせんとて天狗にうしたまふとのこと。
なりて高山後嶺に大海の汁をとれがごとくにて。平地
より甚しきなり。風雨寒暑爆涙乃天地の乱も平地に
いふかつりて。たくがれ相根乃宿愛宮の坊ようなる沙汰
六月大暑の節なる夜陰に火浮上綿入りなるよ。平地

乃ち各のごとくなるべし諸人の志る所なり。万事もこれに倣
じて平低人居の拾ようなるべしと考べし。ねうゝ行
うゝ平地よりして物すごく事出ほうれば。天狗どの所為と
なるべし事かべきなべし。大峯山上新宮の有時
坊へ祈うのうち。其下行糸ありてうつくしくこれをすぐ
ようたるべきなり。人力にてすべきをのけても高山の人
乃動あり。深山うれどかりし獣あることいつよりはよば
ず。海中より猪鹿のあるごとく。造化の鑪鞴にゝ出まる事
うたがいなし。いうなのあるまじくたいはなきまでに天狗といふ
獣あり。人を害をうるまいとうべゝ世人乃

たるべきよ佛神にうべてこれを害ることのよわゝど。只鳥獣
とはゞ鷲鷹野猪狼などのごとくはゞ事とゝ
なべし。山伏のごとく姿をして。猥不浄や或い罪の軽重乃吟味
後をして刑罰を行ひ。殺あるいすることよ
さやうの事うたがい。御公儀のほう傳ゝもうべたるべし。の
罪のかるゝ又い善悪のたゞしいかのてでいでるあまたに
天狗どの細工にあらざるべし。天狗ど女を嫉ひ妬て
い自身やうのうい姿。女の恨ひ暗ひ来たりたるべ
ゝあるべし。鼻のきいをとんとうゝしい女中ど暗でもわか
うけてこそたべ。久米の仙人りぶよ所為をとうゝしたうん

さく陰でいうて。まそく〳〵そだてやしこそで作きざんでわらてを
作をつのを正法よきぶくろ。よく〳〵たをしをそ天狗乃
誉の業い行をて わく人間のけがを不浄や。女乃罪のぞんを
やくしのぞ悔しをろえ懺悔しをろべし

やさと業

道行く〳〵をよ者しをろ。神代のむ〳〵女神男神のみとの
まくだし〳〵夫婦の道ををろ作も冠婚喪祭の大礼
にして五輪の一つ天を陽ら。地を陰とわをろ乃夫婦の
けを万物のをををつ。生くすい丈畫蔵に〳〵かぎをを
う。その徳をうけて男をうを女をうを夫婦中〳〵をつ〳〵

わて、かつををのむつごのかをまう。一滴のけがをうをんけをん
やをんをで作ふ業をとををつけ。子孫の種をををうを母よ
かをを。ひを弟よ。伯父上叔母よの名も多をんぞ人倫の大事
にををれぞ。をれのをぐさをの年乃をををかをを知れよ
ぞの事ぞう。其大事の業をとが〳〵をを人のをぞをんかをを人
をを。ニ十よ成くいかをしをものをを〳〵ニ十よ成て大事の
をつをを作をををまをぞ。をを母やかを母の月をぬをを。
さまぐ〳〵とうけ。或ぐをれわをしを恐び違も夫婦のをを
のををあを。塔ををいづれを言をを。
つをの水をを尋れをを行者をよみたまを〳〵ぞわく

いましかりしの後まる出ところのおとのさかひことゝもく
あとゝろみだれとさゞめよろ王孫の手なるし。衣裳乃花す
慰ともなりき。かくさちの恋にも色をこのめば恋路のまよひ。
むかしもそれくの恋あくまでゐる艶をうつくしね粧ひよ紅粧
目をよろこばしめの粧や臙脂のいかめしき風俗ようんとれ笑がほよりざ
さまで。悠なるまんぬ銘々の物好。蓼喰ふむしもすきぐ〳〵にて
何がかなわらしひ移りよ家をまたき縁乃あだなるぞかし。
あらひい女をとおらし。おひたひたんえうたまのほとさ。鳥は西へ
うごいろくよ恋でござる。好とひのかうふかんじんの床のうち
いとし可愛かすがしひい上は上人より下庶人までもうち道楽にかゝりぬも

なく。其むかし時の様をいへば。たとへいやしき者も若党さ
もなりじとつまでで。夜ごとにあそびかよひし川竹の枕ならべなれじかる
ざんべし。ほとんひとく。かたがえじめんらん。請とらまじを外題をさ
ひでし。松乃位のよ○すらよう過ぎさのすくまでもでたものもなく人は
夜ごとくく大尽のくはをもふ人ひとつさらでなんぞまでのと思ふ。
とてもやそごとをさうれ世のたるほどに自由よかなき。なにとても新れ
あふせの枕さでほとんひ夜もわすれぬ風流のとうやすも真実な
恋れかりとのうれど。其枕こそみんぐのいとしかゝむひまんぐどの
かゝるあ常の恋うままし。たびしよかゝれ真実よいいのちをも
存しまず。地獄乃沙汰もときこそん傾のを縁で由うぬれ。

公の沒絆いやうとて仕ることくがいかゞとそれきこうし
よりて拙たることもせあるべし。所詮愛人のかゝはりをうんどする
をこそいとやくなれ。家身を責てゆくことなれば
此道のうらしまのうれ世よぜたりとでもうめまいまうの色と
情。まことあ命乃長短うべし。常乃世中もよど経乃
きこんもなくとゆくさくあれまこの色ていうしいもの。
ふたいくこうろうこうこ。此あどこをとうんたまく虚うこへう
うんとあらふぞ

易學乃辨

往昔二ひしてうよとやめうん東武の人よ侍ありてく

易学に長ずといふを以て東都京師よ名をくれたるに射覆
乃占ふ所一家の筮法を立。朱子わるい梅花易等ようこと
古易一家言ふとうる書を著し。筮竹も別製よりうらく卦象を
作る筮木名あるて始事の者これを弱び老子ようく古易の今よ
射覆會よりと家名くいい或ハ古人の名を書ハ尚時名誉
ある学者藝者わるい戯ゑるの名を書て答よれたる人物
うらを出せいこをを筮すいふの人とする。或ハ煙管寶玉等
硯名の小器を答に筮ん者あれをそしいい古易のこと絶うり
とを卦面の表倒の卦象をとりて又裏面の卦象をとりて
こをとをよりてすこしにてもを学よりたる人いこれをを知ら

すまあるべしとあらうと但徐学乃如いろ
いろとわかれぐ今時にいろ〳〵まちまちく誰そ
ぶんもうしぬべきよ世の中の学問をかたるに易をよくしる
とする人もおほく失れ侍人獄訟又は其身よりもむかしまれ或い
疾病婚姻名の吉凶をとらんとあれそんことを当とし陰陽の
ことをとぜんとそのぶんもうし天地の道日月の運旋陰陽吉凶
の字を新人数を極ん事をねがはんがゆへ法の学をあつめて
吉凶悔吝の機をさんや易学の学問をなうべきもの子
夏の傳を初とし王弼が注朱仲晦の啓蒙徐紹卿が断易。
京房が易傳邵子の梅花心易程氏の傳焦延寿が易林或い

左傳の易其外管輅郭璞崔浩載洋晁以道呂東萊が輩名
易よ名のるものハ家のそのとうくて異同あり古易の一爻変
も朱子の六爻変も邵子乃先天の易も諸家の異説も吉凶悔
吝乃理を知ハ嫌疑と定ん惑を決するよりハ。史記曰庖
犧氏有聖徳仰則觀象於天俯則觀法於地旁觀鳥獸之文
与地之宜近取諸身遠取諸物始畫八卦以通神明之徳以
類萬物之情造書契以代結縄之政神農氏遂
重八卦為六十四卦とうくを之天の方位已
定る其時いまだ易よ文字なうし。文王後天の方位を定先
を繫周公メを作り孔子象を製し繫辞の傳を述四聖人

のよを經くうるものにく。天地の道を彌綸す。繫辭傳曰
吉凶者失得之象也悔吝者憂虞之象也變化者進退之
象也剛柔者晝夜之象也六爻之動三極之道也是故
君子所居而安者易之序也所樂而玩者爻之辭也
是故君子居則觀其象而玩其辭動則觀其變而玩
其占是以自天祐之吉无不利彖者言於象者也
爻者言乎變者也吉凶者言乎其失得也悔吝者言
乎其小疵也无咎者善補過也是故列貴賤者存乎
位齊小大者存乎卦辨吉凶者存乎辭憂悔吝者存
乎介震无咎者存悔是故卦有大小辭有險易辭也

者各指其所之云云これらの意義をはつきりとそなへ
明文なを知ることを得ることそれ巡
ひとを知事の成敗を考へ惑を定めて悔吝を
蓋盈滿を惜み嫌疑を決する筮の書たるべし弘
王世貞史記の評に伏羲の八卦を畫する筮の爲に設るよ
わ。後の聖人堯の數と合するを見て筮を信ずる
ま理を窮くことを卜筮より傳するはわずかとして編述而
篇よまつよの言易よりおよび五十以學易可以無大過兵と北章
何晏皇侃開昌朱熹陳氏仁齊徂徠谷子等の諸儒其說
紛々たりといへども妙解ありて解を述べ

孤れて仁齊の之るところ易い陰陽消長の事ときわめん進
退存亡の理を明にす其教とするや貴賤を退て損し
盈滿より居て卑を思ひ謙をそなへ則ち大うるること
うるまを知るうるとそう。程子王世貞仁齊の儒甚かの
端儒もさるよりぐく教の書とんるの孔子の学ぶよ
今時賣卜の者司馬季主のごときはわるよ。宋忠賈誼が言の如
く多く詩書を言て以て人情をれ愚く人の祿命をもるくして
以て人の吉を説ひて擅よ禍災を言て以て人の凶を傷つ繕て
鬼神を言て以て人の財を乞しめ厚く礼謝を求て以て己に私する
の臺のごと世よ易といふものい巫祝く弦を用て聖人乃

書名を汚す。何某の射覆の書のごときも卦象を分ると甚変
断よ切を積の切偶球摩の為うるべきるる四聖乃ちよれるる
ものを以て戲まよ玩ぶ嗚呼これ愚が愚し虚うるとたやすし
浮言の名ある易者たるもの礼謝と貪る賣卜の後うんで
弾うんや世をの人い巧詐を以て虚名を飾り空利を導く
愚人を誣惑ふ婦人ふ財ある人ふる僧ふ行の識わ
つくる鬼神巫祝乃理よ通ぜんや。世俗皆雲名人相筮法ぶ
相門ぶき類うると思うて。大うるまうる人相乃術よ書しく述
たるまでくよ雑ぜ。雲名人相の甚多の將来とうるい
ちうてこまを去ちまうる。易い疑を鬼神に問ぶしやうく

其事の吉凶利害を考て凶を棄て吉を行ふ道理人事
乃利害得失大抵十方三方或は六か四方に分るゝ十方五行の
ことわりを三分わるゝ事うれべ。たまたまこの三方のかたつく
者わるんやくの思慮工夫もよろしさとなりさかたにくる
ゝ事すくなし。十指の中ひとさゝる十同の見ふこゝろい分縁の
後ろ。五千人の諸々八一士の誤をよ去ずといつまもあき
ごとをれ其の視能をわるゝ。大抵世上の事八人ゝ
いとい人わるゝといつ多分よくて多方にうゝとのるゝ。
今五分人分の理わりて甲の方も一得一失乙のるも一得一失か
ゆゝ行ぶべきうれ事の吉ようゝぶ人の思ふ事よりぶ。かゝる

やゝ行ん鬼神よりゝ。そこて。甲乙其占の吉ゝる方に後ゝ事
をうんこゝ。こゝ易の易ゝるとこゝるゝん。都て将来を占ゝる
皆此意ゝ。人事をこゝて鬼神よたゝしこゝゝ。
今世ゝ事するゝ。此の人事をこゝてゝもゝ。
あの考ゝる易ゝ。此の勝ゝ人の私欲をそれ占ひわ。
鬼神ゝ人をゝこゝけんも。賁ゝの者よわゝくきく。
祢宜山伏祈禱坊主のたゝ人ゝ其れ物を金ゝ自分
ゝも易の道理のゝ人ゝ。
ゝるゝ人ゝ。
ゝ。
ゝ信ゝ。
ゝ。

易時を問つる所に傷せられて。拜謝を求く占を
うたゝに五十歩百歩のこと。その人名司馬季主ぞ
わるべし。愚が行ふ所の其事の可否を鬼神よくめぐし
とふ時よりして。信公堅固よりして。其身齋潔戒慎恐懼を動
て。疑人まうこと。朱子の筮法も古易の紐をも信系の占法よ
て。假如蔡氏の儀範九八十一の占法もつまされた拘か
ゑ。信よりふ曇を行くこと鬼神こゝを祐んやいうんや
易の占法をや青銅十二錢の礼を性。貴下にあつて者も
亦礼物を貪るのこと。主人も筮者も鬼神をうるあるとう。
各たのまず行ひとの行ふ。法つこの業して鬼神うんで

こゝを告んや。如此乃事うれの人世てよ占へしとやまし
聖人の易の形よりつく巫祝山伏の後世をうたぐこと行ふべき
うりまとの易学をまうびえぶ天を楽命をうん。子曰夫
易開物成務冒天下之道如斯而已者也是故聖人以
通天下之志以定天下之業以断天下之疑

仙人の説

天狗の縛よりつく。日本こむつ天行ひとのを
天まにみあぐ。濱之又仙人とうを
学べうたるにみ。日本の久米の仙人うていこと。
列仙傳うて書もうし。郁乃天狗もうづまりまけうる。

唐の仙人も不死なるをあらう。天原発微に西山の真氏に神仙の
說に齊の威王燕の昭王のころより始り。秦の始皇漢の武帝に
至て甚盛なり。皆方士のうたへ所なりと秦の始皇帝長生のあさ
のあまりに徐福といふ方士に命じて童男童女五百人を率て蓬萊方丈の
島に不老不死の薬を求めしめ。徐福を使令して日本に渡り紀州熊野浦に着船し富士の麓を経て
つくばに至り給ひ徐福の墓ありとぞ。西漢の武帝又仙術
を好て殿宮地八所を建て。兼露盤をこらしたりしかぐの事を信
用ひ史仙術をなる方士かるく出て。やうやういろいろ仙人を
せんぎすべしとぞ。つづいてこの身に崩御ありぬ。ぜうんとなる

陵に神仙の事を奇妙にして。仙家の書とて多くの出来たる。
劉向葛洪が輩。抱朴子神仙傳などの書をこらへ。黄帝老子を
祖とし黄老の術を学ぶ。しかるべきまつり。黄老とは
流れ孔門の教へをいらべど。仙術の祖とすいられちがへる
まうり。黄帝は上古の事うたがはしきをきめ。老子は長寿
たりしかども終る所を去て。仙人乃元祖
うたへ事もすく。終よかきの書の老子とされがたきと
いへまあるとも言がらえ。仙をとれたるうる澄擬もうし取
にあるぞ。老子の学は其意を熟得すれば世上の傷者乃ちつく
かるやうなるものでは形。甚そなぐべきなり。仙人乃祖人うたへ

いついわやしむ屋をまきうう。仙の手六経よりでて。多仙傳にそなはる。
そもそもよ得ての術を書のせ或は風よ御し。雲に翔り或は龍よ
乗り鶴よ駕し。又は鯉よ乗り紙よ乗るなどまぬくのまきの
ものも。法あるべきことなるゆもうし。又は正史に載せるものなど。
劉向高洪が後に言へるごとくなる。歳を経ては気を吾齢
かぞへうしと。法をとどめかぞうるを余をもわれたる後ひてうんてう
後擬もうし。周の穆王乃四童世よりも遠く鄴綜山より後往
穆王のさづけられし。釋迦乃四句の文のたうびにて。七百歳を
経くこと三國の末魏の文帝の時名を彭祖とかへて出るあり世
いる類も。何とたうる證據ありて四言の長きたるもの

うつとするや愚い信じがたう。まづ信ぜび書るなれに去よ世
やうんにく。和漢ともに靡くの書籍虚たけうる。夫人を上
壽百年前好うる者。和漢ともに九二千有餘年大抵同じ紀
うう。漢代にくも上古のくに者一萬歳。あるいは幾百年なるど
いうるもの細ことあるべし。実に正史に載せるなく
きこうそい後よどう為べくく。百家おほうる者ほうをなる
まとさうす爲べし。始めて終あるべし。生あれば死
あり。不可思議乃天地にさく邵康節其名を紀て。天地の
始終十二萬九千六百年一元の數とさうべいうんや人壽を。
仙人よぬ行かせても一度いろい死ぬを者うるべくくなをしいる

に死で去る。彭祖が七百余歳も七夜の内に死ざ
赤子も生まれたる。死せざるよりまた死せざるべ
のうちひとりも仙人ぞうれぐ。浮世の若ざくしこれ
ひとりも仙人ぞうれぐ。浮世の若ざくしこれ
ひて長生きする者もうし。古人いつぐ人安うれば生を楽む。
痛び死を忘れ生を惜む。かくまで衆人の行ひ命うるこ
わすれ猛かさうて仙人ぐしこれ。長病の
人ぐ茅とめ。さまで考へて病若やまざれば危人
みぐも死を惜まれるあるう。貴人いとうん平人ぐも
財宝ぐ持。仕事の望のまま人の死を嘆ぐ
まうう。貧苦よせまう行ぐの猛後すとの仕事ぐ人も

苦厄よれ人ぐ。浮世の財宝をいやしうる敬ふ
ぐ。此世ぐの行ぐ敬ふ。如此の
世界の有ぐ長生きぐ。
のぐ死ぐの行ぐ面白ぐ
ずや。いやぐ一度の猛後ぐ。
死後ぐ二千歳乃又八百年のとれぐ長生の祈ぐ
ぐ。其上人界の仙人ぐ
仙人ぐ色を見ひしわぐ。男女乃淫楽
奥ぐ催。ぐ美肉を食ひ。美味を求ぐ服ぐ華美乃飾
をぐ。耳ぐ琴ぐ三味線ぐの音をきて。或ハ俵ぐ白拍子浄ぐ

音曲又は茶香諸藝の示し或は衣服家宅の結構まことに
その身の立身に拘感をるの類人情大略相同じく人乃
仙よりこの方面のうるう。強ひて仙人の長生するやうをうみだ。喜怒
哀樂愛惡欲の七情を離れ。穀食を辟。身一いの木の葉をまとい
霞を食ひ。乳を若深山出谷より住と。おのおのたつ人情の
示しを一切捨てすなわち木の葉を食ひ。乳を飲。渴の
をいやしもめをむうさ乳と呑。裸身より寒さをやはらむそふる木
乃葉を着く。風よ御し雲より翔り行用ゐずして。どこへ行のか人
情を離れ身を仙を示すやと。たうる鳥より軽又
身上をうて隱居して生てあるうちの人情よりあはび拘束

死生のごとくしていつの世。年齢相終よりまつ行ずる或
は碁將棋茶香のこと。行ることもせずに一日をくらす。仙人
人情をとる者の所行を行やうのまねを愚かにして老衰して
人よりまさるなきとなるよ人倫をとれるまて
深山幽谷空中を翔りあるいは中をとぶことを見るの乃るい輕業
師のやうにして面白きまねをするにたりて行ず樂
うよりあるんとなるとさやうよ不自由なめして數百年も生のび
なんぞ。せいごとにして住とかるやうやく五十余年の
齡うまとび仙人うとそはふ見聞のまうれども決定に行ずも
ちんづくとなるとふに。此人よ酒もの多く飲

へもせず。蕎麦もくはず。女乃ちかづくもよせず。魚鳥野菜乃
膳もすへねば中を遠だち雲を飲するなどいふことを。
ためしとして。五百年も生て居るといへど。楊角乃縁
儀さらにしらず覗きを見て來ぞうし。千年生ても迚も縁つかぬは死
ぬる身なれば。命を天にまかせ人界の苦楽を人なみにして。
よいかげんに縁をとげ。わとかく生きる人と入るありしくわと
名を乾坤にあそばし。生死の木戸を出て帰根復命世路を
体せば。天地の至楽たらんか。それまでこれ仙人乃仕わざにてもなし
なしくず長生が志をはなれて人は其日か目先見度の喜楽や。
酒色園遊をとそろつくとやかましくみそ。稽古志るべし。此方むとある

俗情の者はさやうの事をしておもしろからず。男の中よりの
楽する絶仕人より見れば女の絶仕は寝をのもしからまし。次
酒より諸白はうましといふて飲すぎて徳ずはいやの仙人
にくことぞあるべき

居行子巻之一終